様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８１４９

研究課題名（和文）プロテスタント形而上学の成立

研究課題名（英文）The Genesis of Protestant Metaphysics

研究代表者
坂本　邦暢（Kuninobu, Sakamoto）

明治大学・文学部・専任講師

研究者番号：８０７７８５３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、プロテスタントの形而上学と神学の特徴を明らかにしようとするものであった。そのために、ルター派とカルヴァン派の神学者たちが、三位一体を否定するソッツィーニ派の異端にいかに対抗していったかを調査した。調査の結果として、プロテスタントの神学者たちは、ソッツィーニ派による神の全能の否定に対抗するかたちで、彼ら自身の神に関する教義を発展させていったことが明らかになった。また、彼らのソッツィーニ派への懸念が、デカルトやスピノザの新しい哲学への彼らの反応を条件づけていたことも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
三位一体を否定したソッツィーニ派は、初期近代の神学者たちに大変な脅威であると考えられていた。にもかかわらず、ソッツィーニをはじめとするソッツィーニ主義者たちの著作が、歴史研究の対象となることは比較的稀であった。本研究は、この欠落を埋める役割を果たした。また、このソッツィーニ派の存在が、デカルトやスピノザの哲学の受容のされ方に影響を与えていたという点も、従来それほど強調されていない点である。この認識を出発点にして、今後初期近代の神学と哲学のあいだの見過ごされていた相互作用を明らかにできる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：This research project has aimed at identifying the characteristics of the Protestant metaphysics and theology, by investigation how Lutheran and Calvinist theologians opposed the Socinian anti-trinitarian heresy. It has revealed that in opposition to the Socinian denial of God's omnipotence, they developed their doctrine on divine nature and attributes. It has also made it clear that their concern about the Socinian heresy deeply conditioned the way they reacted to the new philosophy of Descartes and Spinoza.

研究分野：哲学史

キーワード：哲学　神学　異端　宗教改革　デカルト　スピノザ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

宗教改革により西欧の神学は根本的な変容を被った。この変容をたどる作業のうち、16 世紀前半の神学者たちによる活動の調査は、これまで盛んになされてきた。これに対して、16 世紀後半以降のプロテスタント圏の神学は、十分に調べられていない。この時期の神学が再度スコラ学化してしまったとして、低い評価を与えられていたからである。しかし、この時期の神学の発展の理解は、16 世紀後半から現れる異端との対決や、17 世紀に現れる新哲学との対決を理解する上で不可欠である。

２．研究の目的

本研究では、16 世紀後半以降のプロテスタント神学が、いかに三位一体を否定するソッツィーニ主義の異端や、デカルトやスピノザの新哲学に対抗したかを調査した。それによって、ソッツィーニ主義の教義の分析、ソッツィーニ主義への対抗として正統神学側がどのような教義を発展させたか、そして、そのような教義の発展が、いかにデカルトやスピノザの哲学の受容のされ方に影響を与えていたかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

16 世紀後半から 17 世紀にかけてのプロテスタントの神学者や哲学者が執筆した著作、およびソッツィーニやソッツィーニ主義者の著作、さらにはデカルトとスピノザの著作の内容を分析した。

４．研究成果

その結果として、いくつかのことが明らかとなった。まず、ルター派の哲学者であるヤーコプ・シェキウスは、三位一体を否定する異端に対抗するための理性的な根拠を与えるという点で、哲学の意義を説いていた。とりわけ、アリストテレスの哲学が、三位一体の教義の正当化に貢献できるという主張は、ルネサンス以降のアリストテレス主義の進展と、ルター派神学の要請の重要な接点となるものであった。このようなシェキウスの試みは、ルター派内部で哲学の意義がしばしば疑問視されていたことに対抗する意味があったと考えられる(「聖と俗のあいだのアリストテレス スコラ学、文芸復興、宗教改革」)。

次に、ソッツィーニ主義の祖であるファウスト・ソッツィーニの著作の分析を行い、彼による三位一体の批判が、神の全能性の否定に依拠していることを明らかにした。これにより、なぜソッツィーニ以降、神の全能性が大きな問題となったかが、明らかとなった。

この点に関して、アルミニウス主義者の神学者にして、ソッツィーニ主義の異端の嫌疑をかけられたコンラッド・ウォルスティウスの著作の分析も重要な成果である。ウォルスティウスは、ソッツィーニにしたがい、やはり神の全能性を否定し、そのために神の遍在を否定していた。この否定にあたっては、イタリア出身でフランスで活動した哲学者であるユリウス・カエサル・スカリゲルの学説が重要な役割を果たしていた。スカリゲルの哲学の分析は、研究代表者が博士論文で取り組んでいた主題であり、そこでの研究の蓄積を活かすことができた。

この教義はしかし大きな反発を招く。その反発は、17 世紀初頭の原子論者であるデイヴィッド・ゴルラエウスにも見られるものである。ゴルラエウスはウォルスティウスにならって、伝統的なアリストテレスによる場所の理解を、やはりスカリゲルを用いながら否定しつつも、神の遍在は否定しなかった。これは彼が古代の原子論に依拠して、空間の無限性を主張できたためであると考えられる。ここからは、古代の原子論の復興という初期近代の重要な出来事も、ソッツィーニ主義がもたらした議論の枠内で、論争の的となっていたことが分かる。(「有限な神と無限の空間 ウォルスティウスとゴルラエウス」)。

最後に、ソッツィーニ主義への対抗が、デカルトとスピノザの新哲学へのカルヴァン主義の神学者への反応を条件づけていたことを、ギスベルトゥス・ヴォエティウス、サミュエル・マレシウス、ペトルス・ファン・マストリヒト、およびクリストフ・ウィティキウスの著作の分析を通じて明らかにした。とりわけ、デカルトの機械論哲学と、彼による神の意志に関する理解が、両方ともソッツィーニ主義と親和性をもつという嫌疑をかけられていたことが明らかとなった。(「デカルトに知られざる神 新哲学とアレオパゴス説教」; 加藤喜之博士との共著論文 現在審査中)。

これらの成果は、まだ断片的なものにとどまっており、ソッツィーニ主義のインパクトの全容を明らかにするには程遠いものである。また、個人的な事情から、国外の文書館での調査が、計画通りできなかったのは残念である。そのため、研究機関を通じて研究代表者が当初期待したほどの成果は、残念ながら生み出すことはできなかった。とはいえ、未だ十分に明らかになっていない問題にたいして、それを解明する最初の一歩は踏み出せたと考えている。今後は、

本研究で重要な論点であることが明らかとなった、神の意志の問題にして、カルヴァン主義の神学者による理解を調べていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 坂本邦暢	４．巻 1
２．論文標題 有限な神と無限の空間　ウォルスティウスとゴルラエウス	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Minerva　明治大学文学部哲学専攻論集	６．最初と最後の頁 47-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本邦暢	４．巻 52
２．論文標題 デカルトに知られざる神　新哲学とアレオパゴス説教	５．発行年 2018年
３．雑誌名 白山哲学	６．最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本邦暢	４．巻 4
２．論文標題 聖と俗のあいだのアリストテレス　スコラ学、文芸復興、宗教改革	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Nyx	６．最初と最後の頁 82-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 坂本邦暢
２．発表標題 「自分のもの」の二つの相貌　ペトルス・ヨハネス・オリヴィからジャン=ジャック・ルソーへ
３．学会等名 講演会「近世スコラ学における共同体思想の発展」
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 坂本邦暢
２．発表標題 歴史と哲学のシスマを前に
３．学会等名 日本哲学会第77回大会（神戸大学）、公募ワークショップ「哲学史研究の哲学ケーススタディ編　ライプニッツの場合」
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 坂本邦暢
２．発表標題 反三位一体の影の下で　遍在・新科学・世俗化
３．学会等名 16世紀の自然と17世紀の科学：ルネサンスと近代社会科学をつなぐ見えざる糸
４．発表年 2017年～2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 ヒロ・ヒライ	４．発行年 2019年
２．出版社 工作舎	５．総ページ数 280
３．書名 ルネサンス・バロックのブックガイド	

１．著者名 田上 孝一、本郷 朝香	４．発行年 2018年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 352
３．書名 原子論の可能性	

１．著者名 合田正人	４．発行年 2018年
２．出版社 明治大学出版会	５．総ページ数 201
３．書名 いま、哲学が始まる。　明大文学部からの挑戦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考